

論 文

明治6年の住宅建設絵解き

西 和夫

はじめに

財団法人渋沢栄一記念財団付属渋沢史料館（以下渋沢史料館と呼ぶ）の事業史研究情報センターに「衣食住之内家職幼絵解ノ図」と題する錦絵20枚（以下絵解きと略記する）が所蔵されている。住宅を建てる際の工事の様子や職人の姿を絵に描き、説明文を付けたもので、色刷りの木版画である。

渋沢史料館は、「日本に近代的経済社会の基礎を築いた渋沢栄一〔1840（天保11）年～1931年（昭和6）年〕の91年に及ぶ生涯と、携わったさまざまな事業、多くの人々との交流を示す諸資料を展示」⁽¹⁾しており、東京都北区西ヶ原に所在する。この地は「渋沢栄一が1879（明治12）年から亡くなる1931（昭和6）年まで、初めは別荘として、のちには本邸として住」⁽²⁾んだところで、第二次世界大戦でほとんどの建物を失ったが、晩香廬と青淵文庫の二つが焼失を免れて現存し、現在国の重要文化財に指定されている。

絵解き20枚は、渋沢史料館によって1から20までの仮番号が付されている。どのような根拠でこの番号を付けたかは不明だが⁽³⁾、住宅を建てる時の順序にほぼ従っていると思われるので、ここでもその順番に従っておく。

I 絵解き制作の目的と年代

この絵解きは先述の通り住宅を建てる際の様子を絵で説明したもので、「幼絵解ノ図」とあることから子供向けに作られたと判断される。古屋貴子氏によれば、明治5年に「学制」が発表され、文部省は近代教育制度を整えるため教科書の編集に着手し、

それに続いて家庭等で利用するための錦絵を刊行した。明治6年の「文部省布達第125号」として、「幼童教育ノ為メ絵画器品班布」するとともに、幼童教育を助けるために各種の「幼画玩具」を作らせて就学以前の子供の教育に役立てることとし、「今刻成ノ画四十七枚」を班布するとした。「正確な刊行年月日は不明であるが、先の布達や文部省年報の記載から、明治6年頃からの制作と考えられる」と古屋氏は指摘している。⁽⁴⁾

住宅建設に関する20枚の絵もその中に含まれると考えてよく、ここではこの絵解きを明治6年のものとして扱う。

II 絵師について

絵解きには「曜斎国輝」の落款がある。曜斎国輝は二代国輝と呼ばれ、1829年（文政12）年生まれ、1874年（明治7年）の没で、幕末から明治初期に活躍した絵師である。

沖田友紀氏等による国輝に関する論考があるが、ここでは『日本画家辞典、人物編』⁽⁵⁾の説明を示しておく。

歌川国輝：浮世絵師、本姓岡田氏、通称藤四郎。初め貞重といひ、一雄斎と号す。五渡亭国貞の門に入りて貞重と称し、後に国輝と改む。早くより画才を認められ、錦絵草双紙の挿画等を書いて名声あり。（中略）明治維新の際業を失ひて一時落魄せしも、之を意とせずして益々奮闘せり。明治七年十二月十五日歿す。年四十五。東京亀戸宝蓮寺に葬る。

Ⅲ 絵解きの内容

ここで取り上げている絵解きは先述の通り渋沢史料館所蔵のものだが、注6の論考が示すように筑波大学付属図書館「宮本文庫」にも所蔵され、これには「文部省製本所発行記」という朱方印や「宮木宥弑蔵書」の蔵書印などがある。⁽⁷⁾また国文学研究資料館(旧文部省史料館)には「文部省製本所発行記」という朱方印を捺すものがある。三者は枚数等に異同があるが、本論文はそれらの検討が主旨ではないので、これ以上触れない。

さて、渋沢史料館の絵解き20枚だが、曙斎国輝の落款の状況がさまざまであること、「衣食住之内家職幼絵解ノ図」という内題に相当する表題に「之」や「ノ」の相違があること、「第一」「第七」などの番号があつたりなかつたりし、「第一」が二つあることなど重複する場合もあること、表題を囲む枠が一重線だつたり二重線だつたり、枠がなかつたりすること、など表現に種々の異同があり、異なるバージョンが混在していると考えられる。

絵解きの構成は、上方に説明文を、その下に絵を配している。右上部に「衣食住之内家職幼絵解ノ図」の表題を置くが、枠をとつたりとらなかつたり、枠の形状が異なつたりしている。「衣食住」の文字は「衣食住」となっている場合があり、「喰」を「食」に変えた版(板)があつたのではないかと思われる。「家職」は現在では「その家の職業」(広辞苑)の意味で使うが、ここでは家を作る職業、家を作る職人、の意味で使っているようだ。

「幼絵解」は子供向けの絵解き、あるいは絵を使って行う説明という意味だが、本当にこれで子供向けの説明ができたのだろうか。内容は結構専門的で、大人でも素人がこれで理解するのは困難であり、まして子供が理解できたとは考え難い。恐らく、色刷りのきれいな絵を見せ、大人ができるだけ易しく解説し、たとえ十分に理解できなくても、家作りへの関心を高めることができればそれで十分に意味がある、ということだったのではないだろうか。

Ⅳ 絵の解説

以下、20枚それぞれについて、説明文の翻刻と説明文の内容(これを説明と名付けた)を示し、さらに絵の解説(解説と名付けた)を示しておく。絵1枚につき1ページをとることとし、絵を各ページの左上に置き、その右に翻刻を、そしてその下に翻刻文の説明とさらにその解説とを示しておく。

解説には工事に関してやや視野をひろげて述べることとする。なお、この絵解きは家(住宅)を建てる場合の工事の様子を20の段階に分けて説明したものと一応考えて差支えないが、実は工程を忠実に示したのではなく、むしろ職人の紹介という意味が強いように思われる。

我が国最初の鉄筋コンクリート造建築は明治37年とされ、この絵解きが作られた明治6年ごろは当然住宅は木造なので、この絵解きでは木造を例にして説明している。したがってこの絵解きは、明治6年ごろの木造住宅、職人、工具、材料等を知る上に役立つ貴重な資料であるが、説明文を書いた人(当然大工をはじめとする職人に聞き取りをして書いたであろう)と絵を描いた人(絵師)との間に必ずしも意志の疎通がうまくいかなかったところがあるらしく、また説明文にも建築的にみてやや不適切と考えざるをえない部分があつて、その点を十分に吟味しながら読む必要がある。

この絵解きは、「人物の写実的な描写や大作業の細かな道具にいたる正確な表現から見て、国輝の作は典拠や範型からの引用というよりは、実地調査に基づく写生であろう⁽⁸⁾」とする指摘があるが、そうではないことは以上にすでに述べた通りである。

最後になったが、この絵解きが非文字資料として意義深いものであることについてはいまさら説明の必要はないと考えるので、ここでは触れない。

(にし・かずお)

【注】

- (1) 渋沢史料館の「常設展示のご案内」（同館発行、2006年9月）による。
- (2) 注1の文献および渋沢史料館の「施設のご案内」（同館発行、2006年9月）による。
- (3) この絵解きが同館に収蔵されるに至る経緯も不明だとのことである。
- (4) 古屋貴子、「明治初期の文部省発行教育錦絵について」、実業史勉強会資料、2005年10月。
- (5) 沢田章、『日本画家辞典人名編』大学堂書店発行、思文閣発売、昭和2年初版、昭和62年四版。
- (6) 国輝と文部省発行錦絵および先行論文については、次の論考が詳しい。
沖田友紀、「二代国輝の風景画における貞秀からの影響についての考察」、および岡野素子「≪文部省発行錦絵≫の研究」、ともに『日本芸術研究、錦絵特集号、論文編』、筑波大学日本美術史研究室、2002年。
岡野素子編、「筑波大学宮本文庫画帳調査報告」『日本美術研究、錦絵特集号』、筑波大学芸術学系日本美術史研究室、2002年。
- (7) 渋沢史料館永井美穂氏の御教示による。これらは枚数や図の内容が同一ではないが、書誌学的検討が本論文の主旨ではないので、詳しくは触れない。
- (8) 注6の岡野素子論文。



no.1

説明

この世の中で衣・食・住の三つは身を保つ道具であって、その一つの住という字は人々の住居する家のことである。その家を作ろうとする場合は、住みやすい家にするように普請（家作り）に慣れた人とよく相談をし、何畳敷何畳敷という部屋の間取りを決め、その

上で大工を呼んで設計図（平面図）と仕様書を作らせる。これは、その様子を示す図である。

10分の1の設計図（間取り図）を作り、また、仕様帳を書いている様子。

解説

住宅を作る場合の心がまえをまず最初に示し、続いて設計図を作る様子を描く。

「十分一」（10分の1）の「割付絵図」を引き、仕様帳を作るとしている。まず設計図と仕様帳とを作るのが出発点だとしているのだが、設計図は必ずしも10

分の1とは限らない。どうやら絵解きの絵を描いた人が設計図を作る場面を実見してはいないようだ。筆を使ってフリーハンドで線を引くはずはないし、すでに江戸時代から墨刺を使い、物指を使って直線を引く手法は確立しているからである。

普請十分一割付絵図引、仕様帳認るところ

凡世の中に衣食住の三つは身をたもつ道具にて、其一とつ住乃字ハ人々の住居する家の事なり、先其家を作らんとおもふにハ、能普請になれたる人と住居勝手のよきよふに相談をして、何畳敷何畳敷といふ間取りを極め、其上大工を呼んで普請の絵図に仕様といふ拵やうの書附をさせる図



家を拵へる木品のもとハ、国々より出ると雖ども、先槻きハ日向、檜は尾張、松上野などから出るをよしとす、其外国々の処にあひて能すじやうに生る、木品を撰ミ、其所の山方商人といへるが山主より立木を買取、根切と唱ふる木こりが其木を切たほし、土台柱其外いろいろに用ゐ、寸尺を木挽にひかせ、夫を山より里へ出す図

no.2

説明

家を作る材木は諸国から産出するが、何と云っても槻（けやき）は日向、檜は尾張、松は上野などから採れるものがよい。そのほか諸国の風土に合い、よい状況に育った木を選び、その土地の山方商人が山の所有者から立木（立ったままの木）を買取り、根切りとい

う名の木こりがその木を切り倒し、土台や柱など用途に応じて必要な寸法（長さや太さ）を木挽に挽かせ、それを山から里へと運び出す、その様子を描いた図である。

解説

山に入って木を切り出す情景である。

ここには書かれていないが、山に入って木を切り出す職人を杣（そま）という。この字そのものが実に見事に職種を示している。

木を切り倒した現場で土台や柱に使う寸法に合わせて木挽に挽かせるとしている。当時はまだ今日のような機械製材がなかったため、柱や板を作るのは木挽の仕事だった。今日の製材業の仕事を木挽がしたのであ

る。ただし、切り倒した現場で土台や柱を木挽が作り出したというのは疑わしい。木挽はすでに江戸時代から大工と組んで工事現場で製材をした。室町時代には確かに柱などまで山で製材してイカダで川を運びおろした記録があるが、江戸時代にはすでに、まして明治には木挽の仕事は工事現場であった。



やまかたに
 山方荷ぬしといへる商人より諸かたの材木の問屋へいかだ或いは船にて品々の木品
 をつみ送りする図

no.3

説明

山方の荷主という商人から、あちこちの材木問屋へ、
 イカダまたは船でさまざまな材木を積み送る、その図
 である。

解説

山で切り出した材木をイカダに組み、あるいは船に
 乗せて運送する。この図は、イカダで運送する状況を
 描いている。しかしこの姿は何か手本に基づいて描い

ていると思われ、イカダで材木を運送する一般的な
 様相はこのようなものではない。



大工普請を受合、材木屋へ諸色の木口を買に来る、値段をかけ合、入用のしなじな引とるの図

材木のしよしきを見たとるころ

no.4

説明

材木の種類や等級、太さや長さなどを見立てているところ。

大工が家の普請を請け負い、材木屋へ種々の材木を

買いにきて、値段の相談をし、必要な品々を引取る、その様子を描く図である。

解説

いよいよ住宅を建てる様子の説明が始まる。家の普請を施主から依頼され、工事を請け負った大工が材木屋に出向いて材木を購入している。

右手前に「大極上、尺三、十束入」と書かれた材木が立てられている。これは最も上等な（大極上）長さ十尺三寸（約3.9 m）の材木を十束まとめてあることを示している。左奥にも「大極上」の材木が見えている。

畳敷きの部屋には格子状の低い結界が置かれ、その奥で材木屋の番頭らしき人物がそろばんを弾いている。その奥には「材木蔵入控帳、明治□年八月吉日」と表紙に書かれた分厚い長帳が吊るされている。何年であるか判然としないが「五」とあるようにも見える。蔵入控帳とは諸国から集められた材木がこの材木商の蔵に入ったことを示す帳簿だと思われる。



此人足を東京にてハ鳶人足仕事しともいふ

大工手伝の人足普請場地ならしをして、普請の絵図と引合柱はしらたつところへ穴をほり、地形といふて松丸太のくい又はじやりなどつきいれ、其上へ土台石をすへるの図

no.5

説明

大工と手伝の人足は、普請の場所をならして平らにし、普請の絵図（設計図）と対照させ、柱と柱それぞれが立つところに穴を掘り、地形といって松丸太の杭や砂利などを入れて突き固め、その上へ土台の石をす

える、その図である。

この人足のことを東京では鳶人足とか仕事師ともいう。

解説

いよいよ工事が始まる。

建物を建てる場所で敷地を整備し土台をすえる。土台や柱の位置は突き棒で突き固め、地盤が沈下しないようにする。このような作業を「よいとまけ」とも呼ぶ。参加者全員が声を掛け合い、心をつにして杭を打ったり地盤を突き固めたりする。

第二次大戦後しばらくはこのようは作業状況を見ることができたが、今はすっかり機械化された。

重りを落として杭を打ち込む。これを現在も杭打ちという。人力で打つわけではないが、かつて人力で突き棒を使って杭を打っていたその名残であろう。最近では杭打ちの音がすると近所迷惑だということで、杭に振動を与えて静かに沈下させることが多い。振動打ちといったりするが、時代の変化がここにも見えている。



no.6

説明

第六

大工は普請場の四方（周囲）へ杭を打ち、麻繩をぴんと張る。これを水繩という。その水繩の下に水盛台という名前の台を置く。四角な材木に溝を掘ったものである。水盛台の溝へ水を流し込み、地面の水平を確かめる。これはその様子を示す図である。

解説

建物を建てる位置が決まるとその周辺に杭を打ち水平に板を廻す。この板は水平であることが重要で、建物が歪んだり傾いたりしないための基準である。水平な板なのでこれを水貫（みずぬき）あるいは遣形貫という。水とは水平を示す言葉で、水の表面（水面）が常に水平であることにちなんでいる。遣形とはこのような杭や水貫を整える作業を意味する。では水平はどのようにして知るのか、それが水盛という作業である。細長い箱に水を張り、この水面から等距離に保っておけばその糸は水平のはずである。箱に水を入れるのを水盛という。水を盛るからである。水平な糸は水糸という。水糸を基準に水貫を建物周辺に廻すのである。

第六

大工普請場へ水繩といふて四方へ杭を打ち、麻繩を引張、其下に水もり台といふて角なる木にミぞのつきたるをおき、それへ水を流し、地面の高びくを見る図

第七

石工の普請につかふ石は、伊豆の山にていしきりといふものが切出すを、船にて所々の石屋へ積来るを石工がかたきやわらかきの生合また寸尺を見斗ひ、夫を土台下へひきこむやうにきさむの図

第七

石工が普請に使う石は、伊豆の山で石切という名の職人が石を切り出し、船に積んであちこちの石屋へ運んできた石を、石工が石の固さやわらかさや大きさ（寸法）を見はからい、土台の下に敷き込むように石をきざんで形を整える。その様子を示す図である。

以上の作業を総合させて水盛遣形という。

現在はトランシットを使って水平を確保するようになったが、その作業をやはり水盛遣形と呼んでいる。水平のことを今でも水という。そもそも水平という言葉自体が水が平らであることを示しているのは今も昔も変わらない。

図の奥では基礎にする石を石工が調整している。しかし現在はこのような石の基礎は使わない。沈下しやすしい、地震にも弱いからである。基礎は壁位置などの主要部に帯のように配置する。これを布基礎という。柱の下だけに基礎を置く場合は独立基礎と呼ぶ。



第八
木挽は大工の墨がねをしたる木をいろいろにひきわるの図

第九
大工材木を普請場へまハし、角の木くちをきりおとし、跡先へさしがねをあて、木のまがりを見て入用の寸尺に墨糸を引図

此角をひく器械をだい切といふ

no.7

説明

第八

木挽は、大工が墨付けをした材木を色々な挽きに割る、これはその様子を描く図である。

第九

大工は、材木を普請場へ運び、四角な材木の木口を

切り落とし、根元と先端の両方の木口に差曲を当て、木の曲り具合を調べ、必要な寸法（大きさ）に墨糸で線を引く、その様子を描いた図。

この角材を挽く工具を大鋸（だいきり）という。

解説

製材は今はずべて機械製材である。しかしこの時代は、製材専門の木挽という職人が活躍した。太い角材から板を切り出す。工具は大鋸（おが）である。一人で扱う大鋸は一人挽き（いちにんびき）、二人で両端を持ち力を合わせて挽く場合は二人挽き（ににんびき）という。木挽がいないと大工も仕事にならなかったが、

機械製材の時代になって木挽という職人は姿を消した。なお、この図は木挽の働く姿を描いているが、構図は広重の描く木挽の働く姿を下敷きにしていて、働く姿をスケッチしたものだと考えるわけにはいかない。



no.8

説明

大工は、鉋で削り、鋸を引き、手斧ではつり、ノミで柱へ貫穴などを掘る、その様子を描く図である。

また杣というのは、よきという道具で大工の指示に従って大きな材木をはつこともする。

大工^{たいく}かなげつり、鋸^{のこぎり}引^{ひき}、てうなはつり^{ならひ}并^{ならひ}にのミ^{はしら}にて柱^{はしら}へぬき^{あな}穴^{あな}などをほる^つ図^ず

又^{また}そまとい^{また}ふは、よき^{よき}とい^{よき}ふ具^ぐにて大工のさしづにまかせ^{まかせ}おふ^{おふ}き^きなる木^きをはつ^{はつ}るも^もあり

解説

建物を建てるための部材作りの様子を描いている。手前から、手斧で部材の表面をはつって平らにする、貫穴を鑿で彫る、長い材を切断する、板の表面を台鉋で削って平らにする、太い材の表面に墨付をする、以上の大工仕事の様子が見えている。

背中に「上棟」と書かれた半被を着た職人は斧またはヨキを持っていて、説明文によると杣のようなのだが、ここに杣がいるのはおかしいので、大工が太い材をは

つっているところと理解すべきであろう。奥の男は天秤に籠を掛けて何かを運んでいる。

右奥には板が立てかけてある。これらの職人はほとんどは大工と見て差支えないが、この図のように近接した位置で仕事をすることはありえない。働いている姿を描いたというよりは、職人の働く姿の見本を並べてレイアウトしたと考えるべである。



第十三
 上棟として、大工の切組をしたる木品を鳶人足とも仕事しともいふが杉丸太にて足場といふてあしがりをわら縄にて結、土台をすへ、それより柱をたて梁をかけ、其上へ小屋といふて家根の形をとりつくる図

no.9

説明

上棟（たてまえ）といって、大工が切組みをした材木を、鳶人足または仕事師という職人が杉丸太を縄で結んだ足場という足掛かりを使い、まず土台を据え、

それに柱を立て、その上に梁を架け、さらにその上に小屋（あるいは小屋組）という屋根の形をした構築物を取り付ける、これはその様子を描く図である。

解説

上棟あるいは棟上げは工事の一つの区切りの儀式である。建物の屋根の最も高い所の横架材（これを棟という）を取り付けることを指し、ほぼ骨組みができあがったことを意味する。

部材は大工たちが地面の上に並べた状況で加工したり、大工小屋（作業小屋）で加工したりして、棟上げの日に突然、立体的な骨組みが出現する。単に工事の一区切りという意味を超えて、こういう建物が建つ

だ、ということを強く認識させる意義深い一日になる。職人たちはそれを祝うのである。

現在の鉄筋コンクリートや鉄骨構造の建物では棟がどこか必ずしも明確ではないし、木造の場合と違って棟を上げるという工程もやはり明確ではないが、ラストビーム（最後の梁）を取り付けるときに棟上げと称して儀式を行うことがある。木造時代の名残がそこに表れている。



no.10

説明

鍛冶が作る金物は諸国で作られるが、そのうち京都から廻ってくるものは登りと呼ばれ、東京（とうけい。最初は東京ではなく東京と呼んだが、いつしか使われなくなり、東京の名が定着した）で作られるものは地という。鉄から色々なものを作る場合、俵炭というご

解説

木造の建物では大量の釘を使う。釘は現在では工場生産で、針金を切って先端を尖らせ、後部を少し平らにしたものとなっているが、江戸時代から明治中期までは一本一本鍛冶が叩いて作った。釘以外にも建物にはさまざまな金物（鉄製品）が使われ、鋸などをやはり鍛冶が作った。説明文によると釘を50本、100本ず

第一
 鍛冶鉄物は諸国より出るといへとも、先京都より廻るを登りといふ、東京にて製造するを地といふ、是は、鉄を夫々の品に製すにハ、俵炭といふ極やわらかな炭を細かくくだき、ふいごといふ火おこしの具にて火を起し、火の中へ幾度も入ては出し、かなとこの上にて三人又ハ四人にてあひ槌にて段々きたへ、何しなによらず造るの
 図

大中小の釘を五十本百本とかぞへたばねる図

くやわらかな炭を細かくくだき、ふいごという火起こしの道具で火を起し、火の中へ何度も入ては出し、かなとこの上で3人または4人で相槌で次第にきたえ、どんなものでも造る、その図である。

大中小の釘を50本100本と数えて束ねている図。

つ束ねるというが、要するに釘は何本と数えたのである。しかし現在は、もちろん大工が釘を打つときなどは何本と数えるが、生産するときも樽に入れて運ぶときも、目方（重量）で扱う。これも時代の相違の一つである。



畳屋ハ、わらを縄にてあみ、夫を杵にてうち、だんだんとわらを重ね、麻糸にて
 幾通りにかさして床とする、此きりやふにより、なんとふりとて床の上中下あり、
 畳表ハ備後より出るをよしとす、艸にて生る、をよ干揚て麻糸にて織なり、これ
 にも艸によりりうさうおもてあり、へりハ麻の染たるを用ゑ、これを畳さしが製す

no.11

説明

畳屋は、藁を縄であみ、それを杵で打ち、段々と藁を重ね、麻糸で何通りにも刺して床（とこ）とする。切り具合によって床の上・中・下がある。畳表は備後産がよい。草の一種だが、これをよく干して麻糸で織

る。草の種類によって琉球表というのものもある。畳の縁（へり）は麻を染めたものを使う。これを畳刺しが作製する。その図である。

解説

畳は藁をもとにして作ったトコ（床）とその表面の畳表、そして長辺の両端に付けたへり（縁・畳縁ともいう）からできている。畳表は、い草を編んで作る。

長辺と短辺は2：1の長さになっており、2枚で正方形となる。1枚が一畳の広さ、2枚すなわち二畳が1坪の広さに当たる。長辺方向の長さが一間である。

畳が室内に敷き詰めになるのは室町時代のこととされ、それ以前はユカは板敷きで必要な場所へ畳を持っ

てきて敷いた。不要になったら片付ける。これを畳むといい、その名詞が畳である。明治初期には室内のユカの仕上げは当然畳で、廊下や台所などだけが板敷きであった。畳屋の仕事は多く、重要な存在だった。現在は畳を使うことが少なくなり、畳屋も少なくなった。

第四

経師の障子を張るには、美濃紙とて美濃より出る紙なり、是にもはん草といふて紛へる紙あれども、本艸をよしとするゆへハ、美濃のミたらしの水にてすくゆへ美濃紙の事を御手洗ひともいふなり、先紙の曲りをミてはぢをたちおとし、せうふのりに紙をつきあわせ、障子を張上るなり

又襖を俗に唐紙といふ、是を張にハマつ反古紙にて骨しぱりといふて下ぱりをいたし、其上へ袋張といふて紙の三方へのりをつけなぞへに三べん又は四へんもはり、また白紙にて上紙下を二へんべた張をいたし其上へうハぱりをするなり、上張紙は其好みにしたがいはり有間唐紙・ぐわん石唐紙・まに合唐紙・雁皮昏其外色々あり、引手ふちなどハ同く是に順ずなり

此図は張付といふて天井座敷にかべを張たてるところ



no.12

説明

第四

経師（屋）が障子を張るには、美濃紙を使う。美濃紙は、はん（半）草という類似品があるが、本草の方がよい。美濃のみたらしの水ですくので御手洗ともいう。先ず紙が曲がっていないか注意し、端部を断ち落とし、しょうふのりで紙をつなぎ、障子を張り上げる。

襖を俗に唐紙ともいう。これを張るには先ず骨しぱりといつて反古紙で下張りをし、その上へ袋張りとい

解説

障子や襖などの建具を作り、建物に建込むのが建具屋である。

障子は、元来は明りを通さない建具で、骨組みの両面に板や布を貼った。しかし白い紙を片面にだけ貼れば光を拡散させつつ通すことに気付き、便利な存在なのでこれが普及する。これを明り障子と呼んだ。明る障子あるいは明かりを通す障子という意味である。これに対し、光を通さないものは、依然として障子とも呼ぶし、襖と呼ぶこともあった。いつしか障子といえは明り障子を指すようになり、明り障子という言葉

って紙の三方へのりを付け、三べん又は四へんも張り、白い紙でべた張りに二へん張り、その上に上張りをする。

上張りの紙は、好みによって有間唐紙・がんぜき唐紙・まに合唐紙・雁皮紙などを使う。引手や縁などもこれに準ずる。この図は、張付といつて天井や座敷の壁に紙を張りたてるところである。

は使われなくなった。

型を使って模様を摺り出した紙を襖の表面に貼ったもの、いわばプリント模様の紙を貼るのを唐紙と呼んだ。

土壁の上に紙貼りのパネルを貼ることもある。これを張付け壁という。建具に紙を貼ったり、張付け壁の紙を貼ったりすることは経師（または建具師）の仕事である。経師は建具などだけでなく、屏風や掛軸なども作る。



no.13

説明

第五

普請が完成したのち、縁側先へ手洗いの流しなどを付けるのはち（鉢）前とって、これを植木屋が作っているのがこの図である。庭は好みによって色々な工夫がある。

解説

壁に壁土や仕上げのしっくい（漆喰）を塗るのが左官である。江戸時代には壁方などとも呼ばれている。土壁は竹を縦横に組み、縄を絡ませた小舞（こまい）を骨組みとし、これに土を塗り付ける。小舞は細い丸竹を使うこともあるが、多くは竹を割って使う。

小舞を作るのは小舞師あるいは小舞工である。最近では土壁の下地に小舞を使うことが少なくなりつつあり、下地にボードを使う方が乾燥が早いこともあって、このボード下地が普及している。ただし関西地域では小舞工がまだ活躍しているとのことである。

第五
普請出来あがりのうへ、縁側先へ手洗水の流しなどをつけるをはち前といふて、是を植木屋か作る図、庭は好みによりて色々工夫あり
左官の上塗りといふハ仕揚仕事なり、是も人々の好みに随がひ根岸の土又は砂へいろ
いろの絵の具を交あわせ、つゝのまたにてねばりを取り塗なり、其外しつくるといふ
は牡蠣の貝の焼たるを製したる粉なり

左官の上塗りは仕上げの仕事である。人々の好みにより、根岸の土又は砂へ色々の絵具を混ぜ合せ、つゝのまた（角又）でねばりを取り、塗る。そのほかしっくい（漆喰）というのは牡蠣の貝がらを焼いて作った粉である。

土は、下塗り、中塗り、上塗り（仕上げ）の少なくとも三工程を経るのが通常で、それぞれ十分に乾燥させてから次の工程に移る。仕上げを白壁にする場合は漆喰を使う。数寄屋造りでは赤や青などの色壁を使うこともある。

説明に「根岸の土」という言葉が出てくる。根岸は東京の下町の地名だが、この絵解が東京で作られたことを示している。必ずしも全国版ではないようだ。



第六
建具屋は雨戸・障子、其外襖のほね、いづれもそのはまるべきしき居とかもへの
寸尺を見て、其好みにしたがひ、檜・もみ・杉・さわらの木品を挽わり、夫々に見
斗ひ製造する図

no.14

説明

第六

建具屋は、雨戸や障子のほか襖の骨などを作る。それをはめる敷居と鴨居の内法寸法を計り、また好みに従って桧・もみ・杉・榎などの材種を選んで挽割り、

それぞれ見つくろって製造する。これはその様子を描いた図である。

解説

建具屋が建具の骨組みを作っている。建具は、左右両端に縦框をたて、両者を横材でつなぐ。横材の最上部と最下部を横框あるいは単に框と呼ぶ。以上の框4本が四周にあって建具の形を形成する。その中に組ま

れる材は組子という。

建具屋が使う工具の種類は大工に準ずるが、工具は大工に比べると大きさが小振りで精度が高い。



no.15

説明

家作りの建舞を仕切り終わったあと、造作に取りかかる。造作はすべて内部に取付けるものをいう。大工が色々工夫をこらしたところではあるが、さらに好みに従い、天井・敷居・鴨居・床・床棚・板の間・縁側、台所廻り、板流し、雪隠などをそれぞれ取付け、作っ

解説

建物の内部など細かいところを仕上げるのが造作大工である。造作とは建物内部に取付けるものの総称で、具体的には天井・階段・棚・敷居・鴨居などをいう。建具や畳を造作に含めることもあるが、これはそれぞれ建具屋や畳屋の仕事で造作大工の担当ではない。ま

総て此図は造作廻りを拵へるところ

家づくり建前舗理のうへ、造作に取かゝる、是ハすへて内法の取付もの、事をいふ、趣の其好に随ひ、大工の種々工風をこらし次第ありとハイへど、あらかじめまつ天井・敷居・かもひ・床・戸棚・板の間并縁側、台所廻り、板流し、雪隠などを夫々取つけ拵へるの図

出格子又ハれんし窓などさらし竹にて二三寸おきに打付るもあり

ている図である。

出格子または連子など、さらし竹を使って二、三寸おきに打付けることもある。

すべてこの図は造作廻りを作っているところである。

た近年は大工と造作大工の区別が必ずしも明確ではなく、大工がこれを担当することも多い。木造の仕事が少なくなってきたため、造作だけを担当する大工も少なくなってきたのだろう。



no.16

説明

第十一

屋根に使う屋根板は、杉を薄くへいだ（割り取った）ものを束ねて山から運び出してくる。女竹を細かに割って五、六分くらいの長さで先端を斜めに切ったものを鉄鍋でよく煎って、これを釘として使い、屋根屋が葺いている図。

解説

この時代の屋根の葺き方には、瓦葺き、檜皮葺き、柿葺き、栩葺き、板葺きなどがあった。瓦葺きは本瓦葺きと棧瓦葺きの二種があり、寺院など伝統的な建物は本瓦葺きだが住宅はほとんど棧瓦葺きである。檜皮葺きは檜の皮を重ねて葺くもので、一般住宅にはほとんど使わない。板葺きもこの時代一般住宅には使わない。柿葺きと栩葺きはいずれも薄い板を重ねて葺くもので、柿葺きは厚さ1分（3mm）程、長さ7寸～1尺3寸（20～40cm）の薄い板、栩葺きは厚さ3分～1寸

第十

左官のかべを作るには、先こまへがきといふが細きめ竹を柱とはしらの小さき穴へさしこみ、それへおなじ竹の割たるをこまへ繩というハラハにてかがりつくる図

第十一

家根につかふやね板といふは、杉を薄くへきたるをたかねて山方よりいづるなり、是に女竹をこまかに割て五六分くらいづつになぞへにきり、鉄鍋にてよくいりたるを釘にして、家根屋がふく図

第十

左官が壁を作るには、まず小舞かきという細い竹を（壁の両側の）柱の小さな穴に指し込み、それへ竹を割ったものを小舞繩という藁繩でかがっていく、これはその様子を描いた図である。

（9～30mm）、長さ2尺（60cm）以内の板を使う。材種は柿葺きは杉・榎・檜の赤味、栩葺きは榎の割り板。要するに柿葺きより栩葺きの方が板厚が厚い。なお杭（こけら）は誤って柿（かき）の字を使うことがあるが、別字である。

この絵解きは杉の薄板を使用としているが、杉とは限らない。詳しいことがわからずに書いているのではないか。左官についてはno.13に説明したのでここでは省略する。



左官のつかふ下塗の土はあらきだ土をよしとする、是をやわらかにしてつと、いふてわらを一寸位に切りたるをませ、是にて塗をあらかべといふ、其かわきたる上へ荒木田土をどろどろに水を入れてゆるくし、ごみをこしとり、又砂をよく振ひて交合、是にて中塗をする図

no.17

説明

左官の使う中塗の土は荒木田土がよい。これをやわらかくして、つとといって藁を1寸くらいに切ったものを混ぜ、これで塗るのを荒壁という。それが乾いた

ら、その上へ、荒木田土に水を入れてどろどろにやわらかくし、ごみを漉し取り、よくふるった砂を混ぜ、これで中塗りをする、その図である。

解説

説明文にある荒木田土は、東京の荒川沿いの荒木田という場所で採れる土のことである。色は赤褐色、粘りがあり壁土に適している。現在もガーデニングなど

に使われている。壁土は荒木田土がよいと説明していることからわかるように、この絵解きは東京地域を念頭に置いて作られている。



no.18

説明

瓦師は、まず屋根の様子を見て、棟瓦・谷瓦・巴瓦など必要な品を見積り、瓦屋から仕入れ、やわらかな土を屋根の上に乗せ、その上へ（瓦を載せるのだが）、斜めに見通して高下のないように瓦をすり付ける、そ

解説

図の瓦は本瓦ではなく棧瓦のようだ。しかし屋根の右方に重ねて置かれた瓦は平らになっていて、絵師は正確な瓦の形を知らなかったようだ。

瓦の下に土を置き、瓦を押し付けて安定させる。この土を葺き土という。この方法は現在も使われることがあるが、近年は、屋根が重くなるし、葺くのに手間も掛かるので、空葺き（からぶき）といって土を使わない方法が多くなっている。

の図である。

これも左官の仕事なのだが、羽目板などのところへ鋸目を入れ、漆喰で布目などを塗込む。これを木摺という。

葺き土の下地は薄板で、これをとんとん葺きといたりする。屋根葺きの仕事は工程としてはできるだけ早い時期に行うのが望ましい。雨が降ると建物の内部などが濡れるからである。どんなに遅くても、この図のように壁塗りと同時期ということはない。この図は二つの職種を説明するための図で、工程を無視していると考えられるべきであろう。

□五
瓦師は、家根の模やうを見て、棟がはら谷がはら巴瓦など入用の品を見つとり、瓦屋より引いれ、やらかな土を家根へのせ、其上へなぞへに高下なきよふにかはらすめるの図

是も左官の仕事にて、のこぎりをいれ、板はめなどのところ

しつくひにて布目などもぬり込むをきつりといふ



no.19

説明

瓦は、荒木田という土に水を混ぜ、鍬で何度も切りかえし、よく練ったものを木で作った台の上へ載せ（て瓦の形に整形し）、きらをふりかけ、竹へらでよくこすり、これを乾燥させ、土で築き上げた釜（窯）に

入れ、枯松の枝でむし焼にする、その図である。

瓦窯はこのような様子である。

左方は煉瓦（レンガ）を製造しているところ。

解説

瓦とレンガを作っている図である。奥に窯が描かれ、瓦とレンガを同じ窯で焼くと誤解されそうだが、実際にはそういうことはない。

レンガの製造は日本では1850年の佐賀藩反射炉築造に使われたのが最初とされ、建築用のレンガは1857年起工の長崎製鉄所に使われたのが最初だとされる。したがって明治6年当時に使われていて不思議

はないが、この図のように瓦とレンガが同じところで作られたとは考え難い。

瓦の土は荒木田土を使うと説明されている。これもこの絵解きが東京地域を念頭に置いたものであることを示している。なお瓦は全国あちこちで焼かれているが、三州（三河）・淡路・石州（石見）が特によく知られている。

瓦がま図の如し

左の方煉瓦石を製造するところ

十六
 瓦は、荒木田といふ土に水を混ぜ、幾度か鍬にて切かへし、能々ねれたるを瓦の形に木にて作りたる台の上へ載せ、きらをふり、竹へらにて能々こすり、是をほしあげて土にてつきあげたる釜へ入、かれ松の枝にて蒸やきにする図



no.20

説明

屋根漆喰といって、瓦のすきまに雨が廻らぬように塗るのも左官の仕事である。鬼瓦も好みによって家号の印や紋所など色々ある。

樋といって木をくりぬいたものもある。たいていは大きな竹を二つ割りにして、節をよく削り、軒先へ針金で止める。自然に屋根から落ちる雨水を受けるためのものである。

解説

落款（署名）に「曜齊國輝摹」とある。「摹」は「摸」の異体字で、意味は「まねるもとなる手本や型」である。國輝は最後の一枚なのであえてこの字を添えたのであろう。

絵の内容は、屋根に漆喰を塗り、軒先に竹の樋を付け外壁の板壁を塗装するなど工事の仕上げの様子を描いている。説明の最後に「此篇までにて家造りの一通りをする也」とあって、以上で家造りのひと通りのこ

家根じつくあとして、瓦のすきを雨のまわらぬよふにぬるも左官の仕事なり、鬼瓦も好みにて屋号印又は紋所など差別あり、とひといふて木をくりたるもあり、大ていは大きな竹をふたつ割りにして、ふしぶしをよくけつり、のきさきへはりかねにてとめる、しぜん家根より落る雨水をうけるためなり

洗ぬりハ、家のそとまわりを好みに随ひ生洗又ははい墨を入れてぬるも、雨のしぶきかかゝりても木のくさらぬためなり

此外塗家土蔵造など、品々其人の好みあれども、此職方にて出来るゆへ、此篇までにて家造りの一通りをする也

洗塗りは、家の外廻り（外壁など）を好みに従って生洗や灰墨を入れたものを塗る。雨のしぶきが掛かっても木が腐らぬようにするためである。

このほか、塗屋造りや土蔵造りなど色々と人の好みに従って建物には種類があるが、それぞれ専門の職種職人によって作ることができるので、以上述べてきたところで、家造りの一通りを知ることができよう。

とがわかったはずだと述べている。

図には三種類の職人が描かれているが、一枚の図の中で職種を説明しているだけで、この三種の職人が同時に働くのはよほどの突貫工事でもない限りまずありえないだろう。工程の説明ではなく職種の説明なのである。

いずれにせよ、この後、足場を取り払い、建物周辺を整備して工事は完了となる。